

明	渡	し
静	聴	
靈	交	
献	身	
奉	仕	

日本クリスチャン・アシユラム連盟

# 祈 禱 生 活

Japan United Christian Ashrams.

発行所  
東京都中野区  
江原町3-19-12  
江古田教会気付

編集人  
海老沢 宣 道

定価 1部

## 「我ら何をなすべきか」

日本アッシュラム連盟発会式説教

高 瀬 恒 徳

一 二

アッシュラムという三本指を突出して「イエスは主なり」と云うことだと思っている人がいる。

しかし、これは前提的真理で、イエスが主であることを否定する教会はない。問題は、イエス主であることをいかに実践するか、いかに、これを教会の中心に持込むかが課題なのである。

私が先ず第一に提唱したいことはエペソ2・14-18にある、主イエスの十字架のおん血が私らの間の隔ての中垣を悉く取り去られたことを信じていることである。

誰一人、俺の教派はお前たちの教派よりも優れている。俺はお前たちとはちがうぞ、と云う人がいなくなるのである。博士もない、主教もない、理事長もない、社長もない。すべてが愛の兄弟姉妹。そのとき、期せずして使徒行伝2章にあるクリスチャン・コイノニヤが生れてくる。互に尊敬し合う愛の世界(ロマ12・10)が成立する。

第二の原則は「聖霊と私たち」(使15・28)ということである。

この章は初代教会における旧新両派の激しい論争を伝えている。彼らは、互に聖霊に聴いた。そしてそれに服従した。全体が心から納得し、全体が一つ心になって和解した。ここにコイノニヤが生れ、教会が世界的に拡大して行った機密があった。

初代教会の運営、組織、活動のすべてがこの原則に則った。現在、多くの教団が神学論争で苦しんでいる。神に聴かずに、自分の意見だけを主張し合っているからである。「聖霊と我ら」。この原則に従う時、ことばが即福音となり、即立証となる。

三

第三の原則は、個人として、また団体として、聖霊に聴くとともに、直に実行に移すことである。現代人にとっては、お伽話のように思う人が多いが、旧約や使徒

行伝をよむと、神は直接人に語り、人は直ちにこれを実践した。

神は今も我らに語りたもう。しかし人は耳を閉じて聴こうとしない。そこに教会の無気力が生じた。

昭和十一年二月一日のこと、私はある結婚式を司式した。式が終って披露宴の席についた。折から私と向き合って座についたのは、古色蒼然たる老將軍の某であった。私は席にあった私の名札を対手に差向けて「私はいくら者です、よろしく」と云った。すると、威丈高になった某は、さも私を愚弄する態度で「わしはヤソは嫌いだ」と、しかも大声で非常識な返事をした。わたしは、折角の披露宴だ、荒立ててはいけぬ、そう考えていとも鄭重に「それはまた、どうしてですか」と問い糺した。すると「ヤソは神様に向って、何を下さい、かにを下さいとペソを下さい、泣言を云う。まるで乞食だ、わしはあれが嫌いなんだ」。で私は答えた「ああ、そうですか、それなら私もあれが大嫌い、同感です」とすると「それでよく、ヤソの坊主が勤まるものだな」。まわりの人たちが総立ちになって我々を見ていた。「まあ、こんどは私の話を

聴いて下さい。あなた方は上官の命令は陛下の命令として絶対服従をするでしょう」「そうだ」「神様は命令をされるお方です。私ども云う祈は、実は哀れな声を出して物乞いをする事ではないのです。神様が行けと云えば行き、来いと云えば馳せ参じ、これをなせと云えば即座に実行することです。火の中、水の中へでも即座に飛び込んで行くのです。祈りとは神様の御命令を聴くことなのです」と言うと、某は、急に神妙になつて「判つた、よく判つた」と大声で答えた。

その後日譚。この人は後に悔改め洗礼を受けて世を去つた。彼は云つた「軍隊生活をやめてから、誰もわしに命令をしてくれる人がいなくなった。しかし、神様から命令を聴くようになってから、軀がびいんとした」。

われわれは神に聴かずに喋りすぎはしないか。祈禱会でも雄弁家が多く、時には神様に説教するよくな人もいる。「僕さ、主よ、語りたまえ」(サムエル前3・9)

## 四

第四の原則は行動である。奉仕である。時代は急激に変貌しつつ

ある。その社会の要望に対して教会は何を答へつつあるのか。無為無策、会堂と云う四つの壁の中に引き籠っている現状ではないのか。十八世紀の天主教会は、正にその大伽藍が倒れかかっていた。それを樹て直して新しい能力に燃え上らしたのは、イグナチオ・ロヨラを首班とするゼスイット会であった。その一人に日本最初の宣教師フランシス・ザヴィエルがいる。彼らに三つの規約があった。1、命令を受けた場合、「イエスとか

## 無 条 件 降 服

——サレンターの徹底——

海 老 沢 宣 道

スタンレー・ジョーンズ博士によつて伝えられたアシユラム運動が、わが国にも定着して、その連盟が結成され、今後ますます強力に推進されることは同慶の至りである。

小冊子「アシユラムとは何か」に博士が書いてある通り、この運動は、教会がキリストの体として組織と同時に、或はそれ以上に大切な魂(精神)であるコイノーニアの再確認を第一目的とする。このコイノーニアは、信徒の交

ノーとか答える自由がない」。2、命令に対して、「それは何故ですかと質問する自由がない」。3、は「行つて、ただ主のために死ぬのみ」。

そして彼らの標語は「更に大なる神の栄光のため」であった。

日本アッシユラムの役割は何か。教会は我々に対して何を要望しているのか。

御命令のままに、「行け！」としてキリストのために死のう」。

りにおいて経験されるものであるが、単なる信徒の集りではない。「イエスは主である」との告白における霊交一致である。

この告白をしない教会はないであろうが、それがともすれば単なる題目となり、内実性が乏しくなっている時、教会は生命の弱い存在となる。アシユラムはこの点を初代教会から再び学び直して行くとする復興運動である。

実際にわれらは「イエスは主である」という告白を、言葉として

ではなく、生活に受肉させてきたであろうか。今日の教会には余りに言葉が多く語られて、生活が伴っていない恨みがある。われらは主の御前に黙して、「われらの神たるを知れ」との御声に静聴する必要があるのではないか。

われらは自己の願ひよりも、まず主イエスの要求を伺い、それに聞き従うことが大切である。確かにわれらは主を信じ、愛し、敬い御言を聞いている所謂キリスト者であった。しかしその信仰生活の様式は自分が主を信じるという態度である。自分が御言を選択し解釈するという自主性があつた。

故D・T・ナイルス氏が言つた、『人間の信仰に重点が置かれ過ぎて、神の全能が十分に信ぜられていない。人間の失敗には悲観的になり易いが、神のみわざとしての歴史はわれらに希望を指し示す。人間の愚かさを超えて、全能の神の計画がある。』と、『永遠の神はわれらのさけ所、下には永遠の御腕がある』故に一切の思い煩いを捨てよう。

主イエスは「私に従いたいならば、自分を捨て、十字架を負って来なさい」と言われる。この主の招き

アシユラムの五大原理

- (一) キリストへの明渡し
- (二) 御言への静聴と立証
- (三) 聖霊の啓導と充満
- (四) 教会への奉仕と伝道
- (五) 神の国の体験と献身

に対して、私たちは土地を買ったとか、牛を買ったとか、結婚したばかりだとか、父が亡くなったとか、様々な理由で、自分の立場を守ろうとし、御弟子たちの如く一切を捨てて従ってはいなかった。ここに今日の教会の問題がある。

アシユラムはこの条件つき信仰を清算し、自分の一切を主に明け渡し、無条件で主にサレンダー(降服)することである。キリストに自分の全生活を支配され、指導されるために絶対の服従をすることである。

この事ができた時こそ「イエスは主である」という告白が、単なる言の告白でなく、生活に受肉した告白となるのである。アシユラムに参加して真実の告白をする信徒となるうではないか。

◆.....◆

五月九・十両日東京で  
連盟結成式

八地区代表全員集合

ジョーンズ博士が日本において初めてアシユラムを開催されたのは、昭和三十年(一九五五)二月伊豆の天城荘においてである。これは博士が戦後、第四回目の来日の時であった。その後、二三年おきに全国伝道をされたが、漸次各地でもアシユラムが守られるようになり、最後の数回においては八地区で催されるようになった。博士はその度に各地区で委員を選出し、自分が来ない年もぜひ日本人だけで開くようにと切望されていた。しかし、二の地区以外は継続されなかった。期が熟していなかったのか。所が第十回の来日に際して開かれた八地区は、何れも正式に委員を選出した。(第四頁参照)そして毎年この運動を展開しようとの熱にもえている。時が満ちてきたのである。

同時に全国的な協力提携を計りこの運動を他の地区にも波及するため、また世界的な連絡をとるため、日本連盟を結成することになった。これも博士の希望によるこ

とで、昨年来、米国アシユラム連盟とは密接な連絡をとっており今年六月にエルサレムで、世界アシユラム大会が開催された際にはわが連盟代表として、中路嶋雄、鈴木留蔵の両兄にメッセーシを托して送り出すことができた次第である。この結成会は去る五月九日午後四時半より東京目黒みやこ荘において、中央準備委員(七名)地区委員長(八名)の計十五名出席の下に開かれた。まず開会礼拝は高瀬恒徳兄の司会奨励で行われ、海老沢宣道兄はジョーンズ伝道以来の経過報告を行った。

夕食後、大石嗣郎兄座長となり第一回ファミリー・アワーを持ち各地区の昨年までの活動報告を伺ったあと、「アシユラムとは何か」について博士の小冊子により海老沢兄が翻訳した文章を一同で読み改めてアシユラム精神の中心点を認識することができた。

第二日午前六時半、静聴の時、谷本清、中路嶋雄の両兄により聖書から御言を聞き一同熱心な祈りを捧げ、靈交を体験する。

朝食後、横山義孝兄の司会で第二回ファミリー・アワーを持ち、連盟の規約原案の検討、役員を選

挙を行ない、今年度の予算を承認した。役員と理事の氏名は後記の通りである。一同連盟成立の感謝を捧げ、引続いて世界アシユラム大会出席者のため、原田定男兄聖書を朗読、高瀬恒徳兄の祈りにより、一同が代表者の頭上に按手をして祝福を祈った。誠に感激に溢れた「充満の時」であった。

記念撮影のち中食を共にして互に再会を約しつつ西に東に散会した。以上結成会の報告である。

連盟理事役員名

- (理事長) 高瀬恒徳(副理事長) 中路嶋雄(総務) 海老沢宣道(書記) 大石嗣郎、横山義孝(会計) 鈴木留蔵、萱沼孝文(常任) 山根可也、池本金三郎(理事) 白川郷二、村上東、横山義孝、原田定男、中路嶋雄、谷本清、宇都官充、山本繁夫(以上)

世界アシユラム大会

六月二五日エルサレムで東エルサレムYMCAを大会場として五日間にわたり、ジョーンズ博士の開会礼拝説教に初まり、開心の時、パイブルアワー、教会

革新の時、立証の時、午后は働く信仰の時、祈りの時、夜は各国指導者の講演を中心にした大会が持たれた。

三十日にはガリラヤのペニエルにおいて聖餐式を守り、テベリアスに世界アシユラムセンター建設の定礎式を行った。

第二回全国理事会(予告)

時・九月18・19日(一泊二日) 所・ロッテなるけ(網代駅)

理事の旅費滞在費は連盟で負担地区委員の自弁参加も歓迎します。申込先・大石嗣郎理事宛

▽各地の計画

○九州アシユラム、六月十八日の午後から一泊二日、福岡市聖公会センターにて、開会礼拝(平野七作)案内(山本繁夫)聖書講演(ギャロット)(水田政義)の内容で開かれた。

○道南アシユラム、十月八日午後から二泊三日、ちとせ幼稚園舎にて、連盟から高瀬理事長をメイトとして迎えて充実した祈り深いアシユラムとした。

○関東アシユラム(第十一回)

十月九日、十日、一泊二日、青梅線古里の福音の家にて、百名募集、横山、山根、岡田、小出海老沢、満丸、大石をリーダーとして開く予定。

○関西アシユラム、十一月二三日から一泊二日、千里山シオンロッジにて中路嶋雄理事が中心にプログラムの準備中。

▽地区アシユラム委員

わが連盟に加盟している地区アシユラムのために協力して下さい。委員は次の方々であります。

- (一) 道南アシユラム
  - (長) 白川 鄭二、植村 俊雄、増井 誠太、岡村 悦弥、江口 博、細貝 忠義
- (二) 東北アシユラム
  - (長) 村上 東、田岡 伴治、大住 三郎、小笠原栄蔵、高橋 トキ、遠藤 栄、吉池 みつ、高橋 文字
- (三) 関東アシユラム
  - (長) 横山 義孝、高瀬 恒徳、山根 可弼、満丸 茂、萱沼 孝文、岡田 実、那倉 一夫、淵江 淳一
- (四) 中部アシユラム
  - (長) 原田 定男、松原 向、内村サムエル、尾崎秀雄、毛戸建二、山崎久右二門、福岡 浜市、大江 真道、武田 ひさ
- (五) 関西アシユラム
  - (長) 中路 嶋雄、辻中 昭一、林 勝義、中島 彰、岩下 利久、大城 俊彦、福富 俊夫、滝井勘四郎、金 元治
- (六) 広島アシユラム
  - (長) 谷本 清、山白 令一、永見以久三、河井 清二、植竹 利侑、長島伊豆男、池田 定男、野村 功
- (七) 四国松山アシユラム
  - (長) 宇都宮 充、黒田 四郎、伊藤 栄一、岡 隆正、唐渡 弘、榎本 保郎、桑原 重夫、河野 修、戸田 義雄、山村 尚道、久保 正信、中山 真良
- (八) 九州アシユラム
  - (長) 山本 繁夫、ギャロット、鍋倉 勲、平野 七作

事務局より

「祈禱生活」第一号を発行することができ、いよいよアシユラム精神を各個教会に浸透させる仕事が始され、御同慶の至りです。

事務局は今後の毎号を祈りをこめて編集いたし度願っています。どうぞ全国アシユラムの友の御加禱をお願いいたします。

次号から各地の委員は勿論、参加者の経験や立証も掲載いたし度存じます。どうぞ御投稿下さい。明七三年度にはスタンレー兄弟の後継者か、再びメリー姉妹かを迎えたいと思います。そのためにも各地区アシユラムが、今年度において、聖霊体験を深め、祈りをあつくして準備をして下さい。

ジョーンズ述・海老沢訳  
アシユラムとは何か(30円)  
参加者全員必読の文書  
地区アシユラムの手引  
地区指導者必読の文書(50円)